総統閣下に捧ぐ千年王国

ハップスブルグ・ジェントルマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
総統閣下に捧ぐ千年王国

【Ｎコード】
Ｎ２２３８Ｔ

【作者名】
ハップスブルグ・ジェントルマン

【あらすじ】
～本作を読む場合は、以下の点にご留意ください～

・本作は“大帝国にチートオリ主を投入したらどうなるか？”という作者の妄想を、小説風味にまとめたお話（予定）です。
・主人公の目的は、ドクツ第三帝国による世界征服です。作者の目的は、東郷とヒムラーを惨たらしく殺すことです。
・主人公、およびドクツ勢（ヒムラー除く）にとって都合のいい展開が多々あるかと思いますが、ご都合主義ではありません。ただセ

ーブ&ロードを繰り返しているだけ、という設定です。
・作者の原作知識は中途半端です。理由はヒムラーのせいで心が折れたから。
・一話一話の分量が、極端に少ない場合が多々あります。
・本作は、作者のヒムラーや東郷へ対する憎悪が燃えたぎったときに“のみ”更新します。

以上の点をふまえ、それでもいいという方のみ本編へとお進みください。

オープニング

旧ドクツ帝国。それは、かつてはエイリス、オフランスに並ぶ、宇宇宙に名立たる大帝国であった。

それが今はどうだ？　戦場となった国土は荒果て、ボロボロで。さらには戦勝国への賠償金で、経済は破綻する有様。

二十二年前の第一次宇宙大戦での敗戦で、国家としてまさに死に体といってもいい状態であったドクツ国内。まさにどん底。人々は絶望に沈み、暗い未来に恐怖した。

そんな中。突如として現れた彼女はきっと、国民にとっては救世主と映ったに違いない。

ドクツ第三帝国、現総統。世界に知らぬ者なき大天才、レーティア・アドルフ。彼女はその呼び声に相応しい手腕でもって、滅びへと向かいつつあったドクツを立て直すことに成功した。

一体誰が予想できただろうか？　見た目で選ばれた総統が、人類史に残る様な天才であったなどと。いや、誰もが想像すらしなかったことだろう。年若き少女が、祖国を瞬く間に復興させるだなどと。

国民の誰もが彼女の偉業を褒め称えた。国民の誰もが彼女を肯定し、素晴らしき指導者に歓喜した。

これは、そんなアイドルで天才な総統と。あるいは彼女すら上回りかねないバケモノの、統一宇宙ドクツ千年王国建国記である。

オープニング（後書き）

以下、基本設定集。ストーリー進行に応じて変化する可能性あり。

・主人公
ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ
ディエスのラインハルト（人間止める前）をベースに、銀英伝のラインハルトの艦隊指揮能力を追加。具体的な数字は東郷の１，２倍くらいで。
スキルは常勝不敗。『戦闘開始時点で戦局ゲージが★８つ』というチート仕様。相手が大怪獣だろうが明石大佐だろうが、連絡艇一隻で勝利できるバケモノ。

・ヒロイン
総統閣下。当然である。本作は、閣下をゴミ虫から守ろうと思い書き始めたものであるのだから。

～チートなドクツ攻略法～

・三国同盟締結時に支配星域がひとつだけの場合、デーニッツの代わりにラインハルトが派遣されてきます。以降のイベントは、基本的にデーニッツと同じ。ただしＨイベントはありません。

・ドクツの周囲を自国が支配すると、数ターン後にレーティアの過労死イベント発生。その次のターン冒頭でラインハルトが後追い自殺します。

・ソビエトが健在で、尚且つ日ソ不可侵条約を結んでいると、カテーリンのラインハルト洗脳イベント発生。ラインハルトのスキルがなしに変更。ラインハルトの所属が人類統合組織ソビエトに変更。

・明石大佐に頼むと、さっくり暗殺してくれます。

＊注意＊

・ラインハルトがドクツ不在時にレーティアを捕獲し、そのままHイベントまで進めると、怒りの日イベントが発生。ラインハルト率いる新勢力、銀河帝国が旧ソビエトの各星域を支配。以降毎ターン、冒頭イベントで各勢力が吸収されます。最後には日本が支配され、東郷のグロ画像とともにゲームオーバー。ヒロインが総統からソビエトのモブに変更されます。

TURN：　1

ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ。現ドクツ第三帝国全軍総帥、兼秘密警察長官。幼い頃から神童と持て囃され、天狗に成っていた彼が、自らに匹敵、あるいは凌駕するであろう少女と出会ったのは、彼がまだ学生であったときだった。

「……先生。この浮浪児は？」

ラインハルトはむっ、と顔を歪める少女を無視。尊敬する師であるＶＴＶＮへと尋ねた。

「おお、ラインハルト！！　聴いてくれ、私は真の天才という者を発見したのだ！！」

興奮し、そう捲し立てるＶＴＶＮ。いつもの妙な言い回しすら忘れて、支離滅裂に彼は繰り返す。この子は天才だ！！　いずれは私など、足元にも及ばなくなるだろう！！　ラインハルトにとっては数少ない、尊敬できる人物であるＶＴＶＮのその言葉は、彼を不愉快な気持ちにさせるには充分すぎた。

改めて少女を見直すラインハルト。しかし、彼には少女が小汚い乞食にしか見えなかった。実のところ、少女はただダサいだけで、決して不潔でも貧相な成りでもなかったのだが……混迷を極めるドクツ国内において、奇跡的に存続した富める貴族出身のラインハルトにとっては、少女の纏う服は襤褸切れにすぎなかった。

「天才？　おまえが？　はは、先生は冗談のセンスすら天才的なようだ」

少女へと嘲笑を見せつつ、そう溢すラインハルト。少女の顔がさらに引き攣った。

「何を言う！！　決して冗談ではないぞ！！　私は人を見る目には自信があるのだよ！！」

「いくら尊敬する先生のお言葉でも、私には信じられません。師を越えるのは教え子の役目。そのような馬の骨ではなく、この私が。いつの日にか、あなたを越えてみせましょう」

自信満々でそう宣言するラインハルト。師を越える。それは既に、彼の中で決定事項となっていた。

「ふむ……。君のその、自身に溢れるところは好ましいと思う、が……。そうだな、私の言が信じられないなら……君が、自分の手で確かめてみるがいい。彼女のその、溢れんばかりの輝かしい才能を」

「……そんなこと。わざわざ確かめるまでもなく明らかでしょうが……しかし、先生がそう仰るなら」

こうしてラインハルトと少女、レーティア・アドルフはあらゆることで競うことになったのだが……。

初めはラインハルトが圧勝していた。当然だ、ラインハルトの方が年上なのだから。子供の頃の年齢差は、例え僅かでも如実に能力の差となって現れるものだ。しかし彼は、天才に歳など関係ない！！　と言わんばかりにレーティアを見下し、蔑んだ。悔しさに顔を歪ませる彼女を、それはもう楽しくて仕方がないと言わんばかりに睥睨した。

後に彼がこの頃を思い出すに、それは好きな子に意地悪をするという、実に子供っぽい好意の裏返しであったのだが……。当然、見下される方の知ったことではない。結果、数日後。

「……馬鹿な。そんな馬鹿なっ！！　この私が！！　天才ラインハルトが！！　何故こんな子供に敗北せねばならんのだっ！？」

ＶＴＶＮが見い出した天才性を遺憾なく発揮し、急成長を遂げたレーティア・アドルフは。ラインハルトのプライドを、それはもう徹底的に、完膚無きまでに粉々に粉砕した。

「お兄さん、私みたいな子供に負けて恥ずかしくないの？」

爽やかに笑いながらの掛けられたその声は、ラインハルトの心を深く抉った。

TURN：　1（後書き）

東郷「はっはっはっ」

作者「イラッ……」

TURN：　2

意外というべきか、それとも当然というべきか。ラインハルトのプライドを粉々に粉砕し、絶望の底へと叩き落としたのもレーティアならば。彼を立ち直らせたのもまた、彼女であった。

「そう落ち込むな、ラインハルト。相手が悪かったのだ。なにせ私は真の天才だからな！」

ラインハルトの傲慢さが少々移ったのか、不遜な態度でそうのたまうレーティア。ラインハルトはそれに無反応で応じた。

「確かにおまえは私には及ばない。だが、それでも！！　おまえは我がドクツが誇るべき、得難い人材であることは間違いない！！　どうだ？　私はいずれ、この国の指導者となる。おまえにはわたしの腹心として、共にこの国を建て直して欲しいのだ！！」

のたのたとレーティアに視線を合わせるラインハルト。その表情は真剣そのもの。そして彼を見据える視線は、かつてないほどに力強いもので。それだけで、彼女が如何に本気なのかが伝わってくる。ラインハルトの視界に映る彼女は、眩しい程に輝いていた。それこそ、物理的に光ってるんじゃね？　と思えるほどに。彼はそんな彼女から目を離すことができなかった。

ラインハルトは思う。現在のドクツの現状を。いつ滅んでもおかしくない、むしろ未だ曲りなりに存続しているのが不思議なほどの弱国。それが今のドクツだ。それを彼女は建て直すと言った。私とともに建て直して欲しい、と。

ラインハルトは思う。そんなものは夢物語だ、と。しかしまた、同時にこうも思った。彼女なら、と。全宇宙最高の天才を自負し、またそれに相応しい実績を成してきた自分を、僅か数日で追い越した彼女ならば。不可能に思えるドクツ復興すら、鼻歌まじりで成し遂げてもなんらおかしいことはないのでは……？

「私は……」

思えばラインハルトも、かつてはそんな夢を持っていた。現状を知らず、自分にできないことはないと信じていた幼少の頃。彼は確かに、愛する祖国に復活を成そうと奮起していた。それが今はどうだ？　自らの限界を、薄々ながら感じ取ってしまった自分。自らを磨くことを忘れ、ただ現状維持に甘んじていたのでは？

「ふ……」

ラインハルトの口から微笑が漏れた。そうだ、私は忘れていた。何のためにＶＴＶＮに師事し、何のために自らをここまで高めてきたのかを。全てを思い出し、決意を新たにした彼は、決意に満ちた瞳でレーティアへと言った。

「よかろう。祖国復興のため、存分に私を使うがいい、レーティア・アドルフ。このラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ、必ずや卿の期待に応えてみせよう」

「うん！　ラインハルトなら、きっとそう言ってくれると思っていたぞ！　共に祖国を救おう、ラインハルト！　これからよろしくな！」

ラインハルトの言に、まるで花が咲くような満面の笑みを浮かべ

るレーティア。薄らと頬を朱に染めたその様に、ラインハルトは激しく動揺した。

打ちのめされても、何度でも立ち上がる。そんなレーティアの、自らが持ち得ない不屈の精神に、どこか惹かれていたラインハルト。そこに決定的な敗北を叩きつけられ、どん底へと落とされて。そして更に、そのどん底から彼女によって救い上げられて。端的に言って、ラインハルトは情緒不安定だった。

そんなラインハルトにとって、彼女の笑顔はどう映ったのか？
この後の彼の言動を見るに、言うまでもないことだろう。

「しかし、我ら二人が手を組むのだ。ドクツ復興など、既に決まりきった未来でしかない。……どうだ、レーティア？　いっそ、我ら二人で世界を統べてはみないか？　そしてしかる後に、千年王国を築きあげるのだ」

「いや、いくらなんでもそれは無理だろう？　いくら能力があろうと、私たちはたった二人だぞ？　流石に無理がないか？」

「ふむ。ならば掛けようではないか。私はドクツによる、千年王国の成立に掛けよう。それ以外は全て、おまえの勝ちでいい。それで、だ。もし私が勝ったなら……」

ラインハルトは胸の高鳴りを押し隠し、あえて何でもないかのようにこう言った。

「私と結婚してくれないか？」

大口を開けて固まる、未だにダサいままのレーティアを見て、湧

き出る愛おしさに顔を綻ばせるラインハルト。恋は盲目。今の彼には、この言葉がとてもよく似合った。

どん底に突き落とし、そこに救いの手を差し伸べる。これは所謂、ヤクザの手法ではないか？　後に冷静になり、そう思い至ったラインハルト。しかし彼は、きっかけなどどうでもいい！　大切なのは今の気持ちだ！　と気にしないことにした。敢えてここに繰り返そう。恋は盲目である。

TURN：　2（後書き）

大帝国プレイ前
作者「ヒムラーカッコイイな！　なんか、デキる男って感じがするよ！」

大帝国プレイ後
作者「死ねよヒムラー……。いやむしろ俺が殺すわ」

TURN：　3

立ち直ってからのラインハルトは凄かった。どのくらい凄かったかと言えば、あのレーティア・アドルフが引くくらいには凄かった。

「卿が存分に力を振るえるよう、私が舞台を整えておこう」

ラインハルトは高らかにそうレーティアに宣言すると、その日の内に通っていた学校を中退。次の日には親のコネまで使ってドクツ帝国軍へと入隊していた。

軍学校すら出ていない若造が、親の権力に頼って入隊した。この事実はラインハルトに対する風当たりを、かつてないほどにまで強いものへと変えたが……それも、最初の内だけだった。彼は余りにも圧倒的に過ぎたのだ。

ラインハルトはまず、彼の持つその凶悪なまでのカリスマ性でもって、下級軍人を完璧に掌握した。そしてその、掌握した下級軍人を手駒に功績を積み重ね、自らの階級を押し上げる。階級が上がればまた軍人を掌握し、功績を掻き集め、更に上へ。

普通なら有り得ないことだろう。しかし、ラインハルトは普通とは対極の存在である。洗脳染みたカリスマ性に、現在の軍部のトップを軽く凌駕する能力。更には家の権力を存分に使えるよう、彼は既に父を蹴落とし当主となっていた。

そして何より決定的だったのが、ラインハルトの持つ艦隊指揮能力だろう。軍内部のシミュレーターを用いた対戦で、彼に挑戦する者は後を絶たなかった。華々しく活躍する彼に泥を付けてやろう、

といった悪意ある者。常軌を逸した速度で出世を繰り返す彼への、純粋な好奇心、興味から挑戦する者。ラインハルトは誰からの挑戦でも受けた。そして、全ての挑戦者を完膚無きまでに叩き潰した。

挑戦者は須らく、ラインハルトへの畏怖を刻みこまれ。同時に希望も抱くこととなる。彼がいる限り、ドクツはもう国土を蹂躙されることなどないだろう、と。

ラインハルトに心酔する、多数の軍人の支持。艦隊戦含む、軍人としての有り余る優秀さ。そして、ドクツ国内で強力な権勢を誇る実家の後ろ盾。ラインハルトはこれらを効率よく使いこなし、瞬く間に軍の中で登りつめていった。誰もがラインハルトに屈服し、誰もがラインハルトに心酔したのだ。

しかし、ラインハルトがついに提督へと成りあがったとき、彼の出世街道は遂に行き詰ってしまう。それは、年若いラインハルトが軍の頂点たる元帥となるのは、いささか体裁が悪いのでは？　との上層部の判断によるもので。要するに、天与の才持つラインハルトへの嫉妬であった。いつの世も出る杭は叩かれる。当然と言えば当然のことである。むしろ提督まで上がれたのが奇跡といってもいいくらいだ。

しかしラインハルトは、ここで長らく足踏みすることを良しとはしなかった。なぜなら彼は、既にレーティアへと宣言してしまったのだから。彼女が存分に力を振るえるよう、舞台を整えておく。そのためには軍部の頂点など、ただの通過点に過ぎない。彼が目指す千年王国のためにも、彼には立ち止まるという選択肢は存在しなかった。

どうにかできないかと、対策を考えるラインハルト。そんなとき

まるで図ったかのように、彼の勇躍を手助けする事件が起きる。大怪獣、［飛来する厄災］エアザウナ。最も有名な大怪獣の、首星ベルリン襲来であった。

TURN：　3（後書き）

今回のロード回数。

軍部における艦隊戦：２２回

エアザウナの都合のいい襲来：８９回

TURN：　4

大怪獣エアザウナ。全世界を回遊している、最も有名な大怪獣。その優美ですらある外観とは裏腹に、その生態は凶暴の一言。様々な星域に現れては、暴れ回って去っていく。［飛来する厄災］との呼び名に相応しい、正に天災と呼べる存在である。

それに対して、ドクツ帝国軍はどうか？　率いるはアイゼン・マンシュタイン。軍服が張り裂けそうなほどの筋肉を持つ、ドクツ軍の元帥だ。『鋼鉄の灰熊』との二つ名を持つ、ドクツきっての優秀な軍人である。……だが、言ってみればそれだけだった。国力の低下に伴い、ドクツ軍の艦船は十隻にすら満たず。その自軍の貧弱さと、あまりの敵の強大さ故、部下の士気は限りなく低い。

……はっきり言って、万に一つの勝ち目もない。それがマンシュタインの認識だった。

他の列強、例えば一時は世界の半数を支配した国、エイリス帝国。そして、そのエイリスを追い越す勢いで急成長中のガメリカ共和国。そんな強大な国力を誇る大国ですら、大怪獣には抗えない。ただただ成す術なく蹂躙され、嵐が過ぎ去るのを待つばかり。大国ですらそうなのだ。ならばどうしてドクツが勝てようか？

「……いや、希望はある。ラインハルトの到着まで持ちこたえれば……」

自らに言い聞かせるかのように、そう口に出すマンシュタイン。現在、エアザウナを迎え討つ構えのドクツ軍に、ラインハルトの姿はない。

「私の個人所有の艦を出そう。知り合いと共同開発した試作品だが……。あるいは、大怪獣を退けることすら可能やも知れん。可能性は低いがな……。元帥には、時間稼ぎをして頂きたい。私が向かうまで持ちこたえて頂ければ、後は私が引き受けよう」

無論、ラインハルトが増援に来たところで焼け石に水である。そのことはマンシュタインにも解っていた。だが、それでも。僅かでも希望があるなら、それに縋りたい。迫りくるエアザウナの威容は、マンシュタインにすらそう思わせる程のものだった。

「総員、戦闘配置！　いいか、間違っても倒そうだなどと思うな！！　進路を変えさせる必要もない！！　我らはただ、時間を稼ぐだけでいいのだ！！　ハイドリヒ提督が到着するまで、なんとしてでも持ちこたえろ！！」

ラインハルトの名を聞くと、目に見えて士気が上がった。ラインハルトの存在は、今やドクツ軍の希望となっていた。彼ならばなんとかしてくれる。彼がいればドクツ軍に負けはない。彼が存在する限り、ドクツは永遠に不滅である。一部の軍人は、既に崇拝の域へと達していた。それほどまでにラインハルトの有能さは、他とは一線を画してしたのだ。

しかしまあ、我ながら消極的に過ぎる指示だな……。自らの発する命令に、マンシュタインは内心で自嘲した。他国からの誘いを蹴ってまで、愛する祖国に残っても、できることは僅かな時間を稼ぐだけ。マンシュタインは己の無力さに歯をぎりりと噛み締めた。

「！！　目標からレーザー攻撃、来ます！！」

管制官の声が艦橋へと響き渡る。そして始まる、戦闘と呼ぶにはあまりにも……あまりにも、一方的に過ぎるエアザウナ戦。視界を塞ぐ程に降り注ぐ、無数のレーザー群。その様はまるで、光の壁が押し寄せて来るが如く。圧倒的というのも生温い大火力が、ドクツ軍艦隊へと殺到した。

TURN：　4（後書き）

以下、作者にとっての東郷のイメージ。

東郷「女の子を幸せにするのが俺の使命！　だから今日も美女、美少女を喰いまくるぜ！　あ、でも俺には真希がいるから子供は簡便な！　あと結婚する気もないから、そこんとこよろしく！」

TURN：　5

大怪獣出現の報を受け、寝る間も惜しんで新型艦による艦隊を編成、そのまま全速力でもって戦場へと駆けつけたラインハルトだったが……。時既に遅し、とはこのことか。ドクツ軍艦隊は既に壊滅。仮にも国軍たる軍艦は、今や宇宙に漂うデブリと化していた。

「……生存者を探す。広域通信で呼びかけろ」

生存者を探す、とは言ったものの、ラインハルトは半ば諦めていた。この惨状では、恐らく誰も生きてはいまい、と。だが、意外にもその予想は覆されることとなる。

『こ……はドクツ……国元……マンシュタイン。聞こえて……ならば応答……』

ラインハルトは、とぎれとぎれに聞こえて来る声に驚いた。何せ戦場に残された戦艦は、どれもこれもが酷い有様なのだ。ある者は一部をのこしてドロドロに溶けているし、あるものは面影すら残さないほどに粉々に粉砕されている。はっきり言って、生存者がいるなど奇跡に等しいような有様だ。

「ふむ……。通信機器の不調か？　聞こえるか、マンシュタイン元帥。聞こえたなら応答願う。卿の艦はどこにある？　私にはどの艦船も等しく鉄屑のように見える。これでは迎えにも行けん」

『エアザ……はどう…ら近……惑星で暴れて……様子だ。も……の通信をラ……ハルトが……いるので……ば、私のこ……いい、先に……らに向かっ……れ』

噛み合わない会話に、通信が一方的なものであると悟るラインハルト。これでは救助に時間が掛かってしまう。しかし通信の内容を鑑みるに、今もドクツの支配惑星がエアザウナに蹂躙されているらしいのだ。

ここはマンシュタインを置いて、エアザウナ撃退へと赴くべきだろう。しかし、ラインハルトはその選択を躊躇した。もしここでマンシュタインを置き去りにしたが故に、彼が死んでしまったとしたら？　見える範囲に存在する艦は、そのどれもがいつ爆発を起こしても不思議ではないほどに壊れている。ならば、放っておいても大丈夫だ、などという楽観的な考えはできない。

マンシュタインは優秀な軍人だ。少々融通の利かないところはあるが、それを差し引いても得難い人材である。そんな彼を失えばどなるか？　少なくとも世界統一までに三年、いや五年は余計に掛かるであろう。それ即ち、レーティアとの結婚生活が五年減るということである。それはラインハルトにとって、非常に容認しがたいことであった。

「……艦隊を二つに分ける。三番艦と四番艦は、ここに残って元帥の捜索に当たれ。残りは私について来い。エアザウナを殲滅する」

エアザウナはすぐにでも葬らねばならない。しかし、マンシュタインを放っておくわけにもいかない。ラインハルトは決断した。ならば、両方同時にやればいい、と。

「そんな！？　ただでさえ戦力不足なのに、これ以上艦を減らすつもりですか！？　いくら提督でも無茶ですよ！！」

当然のように反対する部下。だが、ラインハルトは譲らない。レーティアと共同開発した新型艦と、指揮官たる自身の力量が合わされば、大怪獣如き恐るるに足らず。彼は自らの勝利を信じて疑わなかった。

「問題ない。レーザーを無効化するこの艦に、私が指揮を勤めるのだ。大怪獣程度、軽く屠ってくれよう」

試作型バリア搭載戦艦。それが本作戦における切り札だ。現在、戦場の主力兵器であるレーザーを無効化するバリアを搭載したこの艦は、まさにレーザーを多用するエアザウナに打って付けと言えよう。

こうして尚も渋る部下を宥め、ラインハルトは進軍を再開した。肝心の戦闘に入る前に、戦力の三分の一近くを失って。

「……で？　それだけの大見得切ったというのに、結局はこの様か？」

ＶＩＰ専用ともでもいうべき、他より豪華な病室にて。レーティア・アドルフは呆れたようにそう言った。

病室、つまりは病院である。あれから意気揚々と進軍を続けたラインハルトは、暴れ回っていた大怪獣エアザウナへと奇襲を慣行。これを見事に成し遂げ、敵に甚大な被害を与えることに成功した。……ここまでは上手くいっていた。それこそ、これ以上ない程に完

壁に。

しかし、次の瞬間には一気に戦況は覆ることとなる。敵エアザウナの放った大量のレーザーが押し寄せたのだ。ラインハルトは慌てることなくバリアの展開を指示、迫るレーザーをバリアが阻み……。一瞬の停滞の後、薄紙を破るかのようにあっさりとバリアが消し飛ばされた。大怪獣の放つレーザーの出力は伊達ではなかったのだ。

結果、艦隊は旗艦を残して蒸発。辛うじて生き残った旗艦の砲撃で、エアザウナはどうにか倒せたものの、その旗艦もまともに航行すらできない有様で。結局、マンシュタインを回収した艦隊が応援に駆け付けるまで、ラインハルトは宇宙の藻屑気分を味わうことを余儀なくされた。

「む……。確かに艦は使い物にならないほど木端微塵、更には私も長期の入院を余儀なくされた。しかし、しかしだ！！　私は人の身には抗うことの不可能な、あの大怪獣を倒したのだぞ？　これは過去に例を見ない戦果で……」

言い訳がましくそう捲し立てるラインハルトだったが、ふいにレーティアが浮かべた泣きそうな表情に口を噤んだ。

「あまり心配させるな、ラインハルト」

……ああ、もうこんな無茶は二度とするまい。私が危機に陥ることが、彼女を悲しませるというのならば。戦場では常に圧勝しよう。どんな苦境だろうと、傷一つなく勝利してみせよう。彼女をこんな表情にさせないために。

「……そうだな。すまなかった、レーティア」

ラインハルトは決意を新たに、そう誓った。

TURN：　5（後書き）

ラインハルトはスキル『常勝不敗』を覚えた！

大怪獣エアザウナの死体という、格好の研究材料＋開発チートな我らが総統閣下（ラインハルトのサポート付き）＝ドクツの科学力は宇宙一　ィィィ！

TURN：　6（前書き）

今回は突っ込みどころが多い気が……。おかしいところは教えて貰えると、作者としては非常に助かります。

TURN：　6

大怪獣エアザウナの撃退。その輝かしい功績でもって、ついには軍の最高位たる元帥にまで上り詰めたラインハルト。そんな彼が驚異的な回復力でもっての早期退院後、その地位を用いてまず初めに成したこと。それこそが秘密警察の設立であった。

秘密警察。後に建国されるソビエトにおいては、盗聴・密告を奨励してまで反体制的な者を捜索し、次々と粛清を繰り返した悪名高き組織である。カテーリンに逆らうだけで、裁判も無しに処分される。ソビエト崩壊後にその事実が世に広まってしまったため、一部では『粛清機関』などと揶揄され、独裁政権の代名詞のように扱われるようになったのだが……少なくとも今はソビエトすら存在せず、またそれ故に、ラインハルトが設立した秘密警察もそんなことを目的としたものではなかった。

ドクツにおいての秘密警察の役割。それは主に、他国のスパイを取り締まることである。

ラインハルトによって成された、大怪獣エアザウナの撃退。それはもはや全ドクツ国民は言うに及ばず、ほぼ全ての国家の知るところである。大怪獣に対しての、人類史上初めての勝利。これによってラインハルトは英雄として祭り上げられたわけだが……撃退、そう撃退である。ラインハルトは真実を捻じ曲げて報告していた。それこそ、自国のトップである首相にすら。ただ一人、エアザウナの死体の研究を一任したレーティアだけを除いて。

国による正式発表はこうだ。『ハイドリヒ提督率いるドクツ軍艦隊が、新兵器を用いて大怪獣エアザウナの撃退に成功。敵大怪獣は

取り逃がしたものの、幸いにも我が軍の損害は軽微であった』。……無論、大ウソである。

艦隊を率いていたのはマンシュタインであるし、エアザウナはしっかりと殺害、死体まで回収済みだ。そしてドクツ軍は、持てる戦艦のほぼ全てが大破。それにより軍人もかなりの数が死亡、または重傷である。まあ、『我が国を守る軍隊は壊滅状態、今戦争仕掛けられたら確実に滅びます』などと言えるわけも無し、仕方がない部分もあるのだろうが。

なぜラインハルトは真実を偽ってまで、事態の隠蔽を図ったのか？　勿論それには理由がある。それは偏に、少しでも他国の興味を引かないようにするため……スパイを減らし、万が一にもエアザウナの一部を盗まれないようにするためである。最も、それほどの効果はなかったが……。ラインハルトにとっても、やらないよりはマシ、という程度の認識であった。

当然ドクツにも、スパイを取り締まる機関は存在する。しかし既に、バリア関連の技術が盗み出されているのだ。技術の盗難を知ったラインハルトは、すぐさまこれに対応した。盗まれた技術を世界各国に売り払ったのだ。これによって軍艦隊再編用の資金を調達、ついでにそのときの対応からどの国の犯行か探ってみたのだが……残念ながら、こちらの方は成果が上がることはなかった。

他国に技術を盗まれた。この事実は、ラインハルトに秘密警察の必要性を痛感させた。そのような大失態を犯す組織を、ラインハルトは信用することができなかったのだ。

ラインハルトは前身たる組織を解体。代わりに軍の信頼できる人物を引き抜き、秘密警察を組織した。しかし、その結果。スパイの

被害は落ち着いたのだが……ドクツはもう一つの問題を浮き彫りにすることとなる。

それこそが深刻な人材不足だ。優秀な者の多くは他国に引き抜かれ、残ったのはマンシュタインはじめ極僅か。中でも軍人は、先の襲撃でその大多数を失った。そんな中での秘密警察の設立、それによる更なる引き抜き。もはや軍とは名ばかりで、中身はスカスカな、自警団にすら劣りかねない状態である。まあ、最も。軍人がいたところで、艦船が一隻もない今はタダ飯喰らいに過ぎないのだが。

そんな状況でもドクツが辛うじて存続しているのは、ラインハルトのお陰と言っても過言ではない。外交によって他国の侵略を防ぎ、自らを英雄とすることで国民の目を逸らし、無能な上層部の失策を必死になって挽回する。

実のところ、ドクツにもそれなりに能力のあるものはいた。しかしそこは天才ラインハルト。それなりの能力の持ち主など、彼には無能にしか見えなかった。天才は全てを自分でやりたがる。何故ならその方が早くて確実なのだから。

そんなわけで。レーティアが活躍できる場を整える、という決意のもと軍に入ったラインハルトではあったが……彼はもう限界だった。激務に次ぐ激務。いつ倒れてもおかしくない、そんな有様だったのだ。

病院のベッドに横になるラインハルトを、心配そうに見つめるレーティア。疲労で上手く働かない彼の脳内に、ふいにそんな光景が思い浮かぶ。もう彼女にあんな顔をさせるわけにはいかない。ラインハルトは妥協した。これ以上は一人では無理だ。なら、どうする？　どうすればいい？　……簡単だ、彼女に手伝ってもらえばいい。

その翌日、現首相のスキャンダルがドクツ国内で盛大に放送された。そして、その陰に隠れて一つの法が改正された。選挙出馬に必要な年齢の引き下げである。

こうして、次期首相を決める選挙が開催されることとなった。ラインハルトの思惑のままに。

TURN：　6（後書き）

ヒムラーの死亡フラグその一。秘密警察の設立。

ヒムラー『次は第三帝国総統、レーティア・アドルフ……。君自身をいただこう』

ラインハルト「言質はとった。至急ヒムラーと、その関係者を指名手配しろ。抵抗するようなら射殺して構わん。……いや、ヒムラーだけは生かして捕えろ。ヤツには相応しい地獄をくれてやる」

もうヒムラーについては具体的な殺し方まで決まってるのに、未だに死亡フラグが一つだけ。遠い……。

誰か“レーティア命なチート転生者（複数）に、主人公ヒムラーが理不尽に襲われるSS”でも書いてくれないかなぁ……。

TURN：　7

それはラインハルトが執務室へと籠っていたときのことだった。常人であれば見ただけで心が折れる、それほどまでの書類の山。それを黙々と処理し続ける彼のもとに、ドクツ軍元帥たる大男、アイゼン・マンシュタインがやってきたのは。

「ラインハルト！！　居るのだろう！？　ここを開けろ！！」

怒鳴り散らすかのような大声と、同時にドアを激しく叩く音。それらのあまりの騒音に、ラインハルトは仕方なしに作業を中断した。

「……あれはもしや、ノックでもしているつもりなのか？」

ラインハルトが思わずそう零すのも、致し方ないことだろう。なにせドンドンという音に混じって、みしっ！　とか、ぎしっ！　などと聞こえてくるのだ。扉の向こうにいるのが筋肉の塊のような男であると知らなければ、ドアを打ち抜こうと体当たりでもしているのでは？　などと勘違いしそうである。

「騒がしいぞ、マンシュタイン！！　そう焦らずとも、今開ける！！」

やがてバキッ……！！　という音が響き、本格的に扉が破壊されそうであることを察したラインハルト。大声で扉の向こうへと声を掛けるも……時既に遅し。執務室の頑強な扉は、豪快な音を立てて打ち破られた。

あまりの事態に呆然とするラインハルト。そして扉のことなど欠

片も気にせずに、惚けたままのラインハルトに詰め寄るマンシュタイン。ただでさえ厳しい顔つきを更に強ばらせるその様は、どこか鬼気迫ってさえいた。

「何故だラインハルト！！　何故、何故……！！」

マンシュタインは勢いのまま、ラインハルトへと掴みかかる。その衝撃では我に返ったラインハルトは、反射的にその手を振り払おうとして……。

「何故貴様が、ドクツの未来を決めうる大事な選挙に出馬しない！？」

その言葉を受け、うんざりしたかのような体で静止した。口には出さなかったものの、ラインハルトの表情は何よりも雄弁に物語っていた。こいつもか……、と。

首相のスキャンダルから発展した、ドクツのトップを決めようという今回の選挙。候補者が出揃うどころか、選挙開催の時点で国民の誰もが思っていた。ラインハルトの一人勝ちで決まりだろう、と。

何せ、今やラインハルトは自他共に認める救国の英雄だ。非凡な能力に、名家たる家柄。そして何より、絶望的な戦力差においての大怪獣の撃退、という輝かしい功績。今のドクツ国内に、彼に匹敵する人物は存在しない。彼のＶＴＶＮすら、ラインハルトには一歩劣るだろう。それが国民の総意と言ってもいいような状態だ。これ

で落選しようものなら、選挙管理委員会が焼き討ちされてもおかしくない。

それがどうだ？　蓋を開けてみれば、ラインハルトは出馬せず。誰もが思った。もしや、ドクツは彼に見捨てられたのでは……？

実際のところ、ラインハルトは自分よりも指導者として相応しい存在、即ちレーティア・アドルフをトップに戴き、自らはその補佐に回るつもりだったのだが……当然、国民がそんなことを知るはずもない。

普段のラインハルトであれば、こうなるであろうことを予想し、あらかじめ対策を討っておいたことだろう。しかし彼は、連日の激務でもはや限界に近かった。結果、対策どころか気付きもせずに放置。事態は加速度的に大事になり……。

「だから、何度も言わせるな。私が選挙に出るつもりはない！！今でさえ限界なのだ、これ以上は本当に過労で倒れてしまう……」

「だが！！　おまえより相応しい者などいないだろう！！　仕事なら我らに任せ、おまえは選挙を……」

「馬鹿を言うな！　脳味噌筋肉な卿らに私の代わりなど務まるはずがなかろう！！　大人しく艦隊指揮の訓練でもしていろ！！」

ついにはマンシュタインまでもが、ラインハルトへと問い質しに来たのだった。

結局のところ、ラインハルトは終始折れることはなく。選挙は恙無く終了した。票の約三割が、ラインハルトへの投票だったために無効となったこと以外は。

当選したのは一人の可憐な少女。ラインハルトでないのなら、政治なんて誰がやろうと同じこと。ならせめて、見た目が美しい者に国の代表になってもらいたい。そんな国民の意見を反映した結果だった。

ドクツ国民は未だ知らない。見た目で選ばれた彼女が、ラインハルトに匹敵する大天才であることを……。

そしてまた、ラインハルトも未だ知らない。レーティアの、その凄まじいまでの変わりようを。

TURN：　7（後書き）

東郷はどう殺そうかなぁ……。そんなことを考えていて、ふと思いついたこと。

作者「……東郷の美醜の感覚が逆転したら、みんな幸せになれるんじゃね？」

東郷→女と好きなだけ犯れて幸せ。

不細工な女→カッコイイ東郷と犯れて幸せ。

美女、美少女→東郷の食い物にされなくて幸せ。

男→美女、美少女と親しくなれる可能性アップで幸せ。

結論→みんな幸せ！

作者「……いや、流石にそれはないか」

TURN：　8（前書き）

なんか、話が明後日の方向に飛んだ気がします。

TURN：　8

ドクツの指導者を選出する今回の選挙。国の今後を占う、大事な大事な大一番。しかしそんな一大事にも、ラインハルトは全くの無関心だった。選挙など知ったことじゃない。そう言わんばかりに、彼はただ黙々と仕事を続けるのだった。

ラインハルトが身を粉にして働かねば、ドクツという国が傾きかねない。だから仕事を優先した。……無論、それもある。しかし、最も大きな理由は別にあった。詰まるところ、ラインハルトは信じていたのだ。自分が何かをするまでもなく、レーティア・アドルフは選挙を勝ち抜き、国のトップへと成り上がるだろう、と。結果の分かりきった選挙など、見るだけでも時間の無駄だ。だからラインハルトは選挙自体に興味を抱かなかった。

結果は予想通り、レーティア・アドルフの一人勝ち。他者を引き離しての圧倒的な勝利であった。……が。それだけではなかった。ラインハルトにとって予想外なことに、レーティアには協力者がいた。つまり彼女は、一人で選挙を勝ち抜いた訳ではないのだ。

……要するに。結局のところ、ラインハルトはレーティア・アドルフのことを勘違いしていたのだった。

ラインハルトは天才である。それも、“万能の天才”とでも呼ぶべき才覚の持ち主だ。大怪獣戦での大きすぎる功績から、その突出

した軍事方面の才ばかりが注目されがちだが、そんなものは彼の本質の一部でしかない。ラインハルトの真価とは、ありとあらゆることを一流以上にこなす、その万能性にこそあるのだ。

軍事、政務、経済、そして秘密警察の運営。更には改革案の立案、技術革新まで。ドクツ軍への入隊から元帥へと上り詰めるまででも、これだけのことにその才能を遺憾無く発揮し、そして過去にＶＴＶＮに師事していた頃には、音楽などの芸術関連にすら高い素養を見せたラインハルト。

しかしそんな、一見完璧に見えるラインハルトも人間には違いなく。そして、人である以上は完璧などありえない。ラインハルトであろうとミスを犯す。勘違いすることもあれば、見誤ることもあるのだ。そう、今回のように……。

ラインハルトはこう信じ込んでいた。私はレーティアに敗れた。ならば彼女こそ、私をも上回る天才だ。私にできることは全て、彼女にもできるに違いない。……無論、勘違いである。

レーティアとて、ラインハルトに勝るとも劣らぬ才覚の持ち主ではあるが……。それでも、全てにおいてラインハルトを上回る、などということはありえない。彼女は国家運営に関してや、新技術の開発などにおいてはラインハルトすら超える能力を発揮する。それは確かだ。しかし一方で、ラインハルトの足元にも及ばない部分も少なからず存在する。解りやすい例を上げれば、運動能力などはその最たるもであろう。当然だ、レーティア・アドルフは未だか弱い少女でしかないのだから。

そしてもう一つ、レーティアがラインハルトに及ばないこと。それはそう……カリスマ性、とでも呼ぶべきもの。未だ服装はダサい

まま、故に誰にも注目されず。かといって、街頭で演説をする積極性もなく。そんな様ではまともな選挙活動など、夢のまた夢だろう。……要するに、彼女にはコミュニケーション能力が不足していたのだ。

ラインハルトは気付かない。レーティアの天才性を盲信するが故に。だからこそ彼は何もできず、気が付けば……。

「紹介しよう、ラインハルト。今日から宣伝相を任せることにした……」

「グレシア・ゲッベルスです。よろしくお願いしますわ、閣下」

愛しのレーティアの隣を、見知らぬ女に奪われていた。ダサかったレーティアを、見違えるほどにコーディネートしたゲッベルス。それはまるで、愛するレーティアが彼女色に染められたかのように感じられて……。

この日、ラインハルトは萌えという感情と、それを塗り潰すほどの激しい嫉妬心を知ったのだった。

TURN：　8（後書き）

大帝国の世界にもエロゲがあるんですよね。ならきっと、ラインハルトも後世で萌えキャラ化されるんでしょうね……。で、優しさしか取り柄のない男に攻略される、と。ああ、下手に英雄なんかになるからこんなことに……。

TURN：　9（前書き）

明後日の方向から、明明後日の方向へ。折角総統閣下が人気投票で一位になったのに、本作は迷走気味です。

TURN：　9

「くそっ……。なんなのだ、あの女は！？」

未だ山のように書類の積み上がる、自身の執務室にて。ラインハルトは苛立ちを隠せずに、吐き捨てるようにそう言った。脳裏に浮かぶはグレシア・ゲッベルス。ラインハルトがドクツのため、延いてはレーティアとの幸せな新婚生活のために身を粉にして働いている間に、いつの間にかレーティアの傍に侍るようになっていた、あの女。思い出すだけで、腸が煮えくり返りそうだった。

これで彼女が無能であったなら、ラインハルトとしてもさっさと切り捨てることができた。しかし、彼にとっては忌々しいことに、そしてドクツにとっては喜ばしいことに、グレシア・ゲッベルスは非常に有能であったのだ。

宣伝相という、聞きなれぬ役職。内心訝しく思っていたラインハルトであったが……。レーティアの身辺管理にプロデュース、対外交渉や契約、そして企画立案……。やっていることは、まるっきり芸能人のマネージャーだ。しかし彼女は、ファンシズムというものを誰よりもよく理解していた。国民に偶像（アイドル）たるレーティアの素晴らしさを刻み込むその手腕は、まるで洗脳の如く。ラインハルトをして感心するほどの手並みであった。

結果、新総統レーティア・アドルフの支持率はうなぎのぼり。当選から僅か数週間にして、ついにはラインハルトすらをも上回るほどの、正に不動と言ってもいいような人気を得るに至ったのである。……英雄がアイドルに負ける。そんな、ある意味で歴史的な瞬間であった。

ゲッベルスは有能だ。ドクツのためを思うなら、これからも彼女にレーティアを支えて貰った方がいい。それは、誰が見ても明らかだろう。しかしラインハルトは、どうしても彼女を放逐したかった。これはただの嫉妬から来る八つ当たり。そう頭では理解しているものの、ラインハルトはその耐え難い嫉妬心を抑えることができなかった。恵まれた生まれ故に、他者を羨むことが皆無であったラインハルト。そんな彼が初めて抱いた嫉妬の炎は、未だ年若いラインハルトを振り回すには十分過ぎた。

「さあ、あの忌々しい女狐の周囲を探ってこい！　なんとしてでも、奴の弱みを手に入れてくるのだ！！」

有能である以上、下手に切り捨てることもできない。ならば別の手を使うまで。ラインハルトは配下の秘密警察を使ってまで、徹底的にグレシア・ゲッベルスという人物を調査した。しかし当然、彼女に疚しい点などなく、出てくる情報も『ソーセージが好き』『服屋に務めていた』『最近恋人を振ったばかり』などと、取るに足りないくだらないものばかり。

「くっ……！　何か、何かないのか！？」

ラインハルトが諦めかけた、そのとき。ついに有力な情報が手に入った。手に入って、しまった。ラインハルトは気付かない。いつの間にか、自身が視野狭窄に陥っていることを。

「長官！　この元恋人、どうやらロシアンのスパイのようです！」

「何？　そうか……。……よし！　証拠を固め次第確保しろ！！
ふふ、これであの女狐を追い落とせる……」

こうしてゲッベルスの醜聞を手に入れたラインハルトは、意気揚々とそれを本人に突きつけに行ったのだった。それが仕組まれたものだなどと、夢にも思わずに……。

「……どうしてこうなった？」

溜息と同時、ラインハルトは思い返す。私はゲッベルスを更迭しに向かったはずだ、と。それなのに、なぜ……。

「……なぜ私は、レーティアと共に舞台に立つことになっているのだ？」

舞台袖からステージを見上げると、そこには『ラインハルト元帥、全軍総帥就任記念コンサート』などと書かれた垂れ幕が。鏡を見ると、そこにはゲッベルスの手によって完璧にコーディネートされた自分の姿が。そして後ろを振り向けば……。

「すまない、ラインハルト……。しかし、私一人では心細くてな……。いや、道連れにしてしまったのは悪かったと思ってるぞ？　でも、その……。ほ、ほら！　最近はお互いに忙しくて、碌に会うこともできなかっただろう！？　こうすれば一緒にいられると思ってだな！？」

そこには選挙前のダサさが嘘のように、華やかに着飾ったレーティアがいて。上目遣いでちらちらとラインハルトを盗み見しつつ、

しどろもどろに言い訳する。そんな仕草を見たラインハルトは、もうそれだけで不愉快な気分が消し飛んでしまった。

ことの真相はこうだ。ゲッベルスは一目見た時から、ラインハルトのことをレーティアに匹敵しうる逸材だと思っていた。そこで彼をスカウトしようと企てるも、ラインハルトは彼女を露骨に避けていたため、碌に話も聞いてもらえない。そこに手を貸したのがレーティアだ。仲間内での不和を解消し、更にはアイドル家業の道連れも手に入るとあって、レーティアはラインハルトを喜々として陥れたのであった。

こんなことをされて、出会った頃であれば怒り狂ったであろう。しかし、これも惚れた弱みというやつだろうか。ラインハルトは笑って許してやることにした。

「いいんだ、レーティア。卿が望むのならば、例え地獄の底であろうと躊躇わずについて行くとも」

穏やかな顔でそう言うラインハルト。そんな彼の懐には、ゲッベルスに手渡されたレーティアのファンクラブ会員証、しかも会員ナンバー一番の特別仕様が、それはもう大切そうに仕舞い込まれていたのであった。

レーティアは未だ知らない。自らが墓穴を掘ったことを。彼女がラインハルトとゲッベルスのやり取りを知って、二人に詰め寄るのはだいぶ先の話である。

TURN：　9（後書き）

レーティアとラインハルト、二人のユニット名を募集中！！　奮ってご参加ください！！

TURN：10

「エル・ロンメル？」

「ああ、多分そいつだ。なんでもかなり優秀な軍人らしいじゃないか。新たに提督に任じようと思うんだが……。ラインハルト、おまえはどう思う？」

いつものようにコンサートを終えたレーティアの、その控え室。彼女はゲッベルスに甲斐甲斐しく世話を焼かれながらも、ラインハルトへとそう切り出した。

「ふむ……。確かに、実力は軍でもトップクラスと言ってもいい。しかしどうも、奴は軍規を疎かにする傾向がある。戦場において、指示通りに動かない駒など害悪でしかない。だからこそ、奴は未だに実力に見合わぬ低い階級に留まっているのだ」

ラインハルトは、軍服を着崩した三毛軍人を思い浮かべた。エル・ロンメル。なるほど、確かに才覚という点では、レーティアの目に留まるに値するだろう。しかし、それだけで提督に抜擢するべきではあるまい。ラインハルトはそう判断した。

大怪獣の襲撃でボロボロだったドクツ軍部。レーティア、ラインハルトの名声が高まると共に、入隊希望者が続出、人数だけで言えばかつてないほどに大きくなったが……。その質はといえば、余りにもお粗末と言わざるを得ないものだ。そう、軍を名乗るなど恥ずかしくてできないような有様だった。

だが、だからといって士官学校を出たての若造を、いきなり提督

に任じるわけにもいくまい。それでは下が付いてこないだろう。最近になって激しい嫉妬心を抱いたラインハルトは、一兵卒から提督へと一足飛びに出世したものがどれほど嫉妬されるのか、朧気ながらも予想していた。

「指示通りに動かないなら、指示を出す立場にすればいいじゃないか。おまえの命令には忠実なんだろう？　なら、おまえの直轄にすればいい」

しかし、レーティアの説得にラインハルトはぐらついた。確かにロンメルは、ラインハルトには忠実だった。本人の言によれば、彼はラインハルトに憧れて軍へと入ったらしい。最近ではレーティアへと傾倒気味ではあるが、それでもラインハルトには素直に従う。残る問題は、部下の信頼を得られるかだが……。

マンシュタインでも焚きつけれて、模擬戦でもやらせるか？　いや、そんなことをするくらいなら……。

「……私としてはデーニッツを推したい。あれは少々、自信というものが足りないが……。しかし、新型艦を任せるには打って付けの人材だろう。技術分野出身であるし、取り扱いには長けているからな」

未だ書類に追われるラインハルトとしては、ロンメルにいちいち構うのは煩わしかった。そこで、代わりに提督の務まりそうな人物、即ちデーニッツを推薦したのだが。

「ああ、言ってなかったか？　デーニッツなら既に勧誘済みだ。彼女には試作艦であるUボートを任せようと思ってな」

技術班は軍部よりも頻繁に出入りしているためか、どうやら既にレーティアが目を付けていたようだった。

ロンメルは確かに優秀だ。何れは元帥にすら手が届くだろう。しかし、ラインハルトがそこまで育て上げるには、時間も手間も掛かりすぎる。やはり、ここはロンメルに地道に出世してもらうことにしようか。マンシュタインの引退後、その後継にでもしよう……。と、そこでラインハルトは閃いた。

「……よかろう。エル・ロンメルを新たに提督に任じよう」

「そうか！　うん、やはり私の目に狂いはなかったようだな！」

だいぶ戦力もそろってきたな。そんなことを言いつつ、レーティアはご満悦の様子。それを微笑ましい気分で見やりながら、ラインハルトは切り出した。

「ただし、条件がある」

「なんだ？　なんでも言ってくれ！　私に出来ることならなんでもするぞ！」

「なんでも……。い、いや。私の直轄ではなく、マンシュタインの直轄にしておきたい」

「それは構わないが……。何故だ？」

「……私には、まだ……やらねばならんことがあるのだ……」

ゲッベルスを憎らしげにひと睨みし、そう零したラインハルトに

は、どことなく哀愁が漂っていた。

ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ。最近の悩みは、処理しても一向に減る気配のない書類の山である。天才を自負する彼が、なぜそこまで書類に手こずるのか？　それは、現総統レーティア・アドルフが、政務よりもアイドル活動を優先しているからである。……ゲッベルスに誑かされて。効果が抜群である分、余計にタチが悪かった。

ちなみに。ラインハルトは、未だ一度しか舞台には立っていない。流石のゲッベルスも、山のように積み上がる書類を前にしては何も言えず。ましてやそれが、半ば自分のせいなのだ。ラインハルトは、怪我の巧妙という言葉を身をもって体験したのだった。

ＴＵＲＮ：１０（後書き）

ＴＵＲＮ：１０を記念して、本作を削除したりは止めにします。代わりに更新速度がかなり落ちますが。

今後は以下のように進めていこうかと思ってたんですが、ね。いや、エロゲでセーブ箇所が少ないと思ったのは初めてですよ。

一章
第三帝国建国記

二章
全軍総帥の統一戦争（ダイジェスト版）

三章
総統閣下の千年王国

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2238t/

総統閣下に捧ぐ千年王国

2011年6月10日17時55分発行